

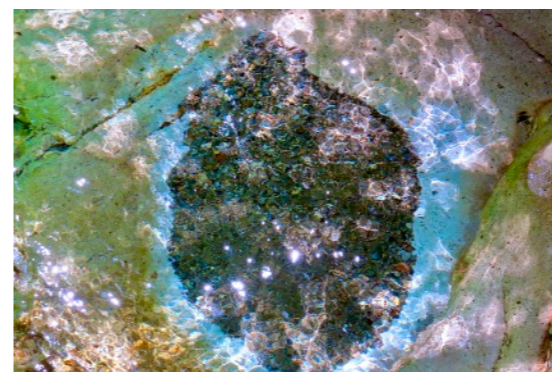
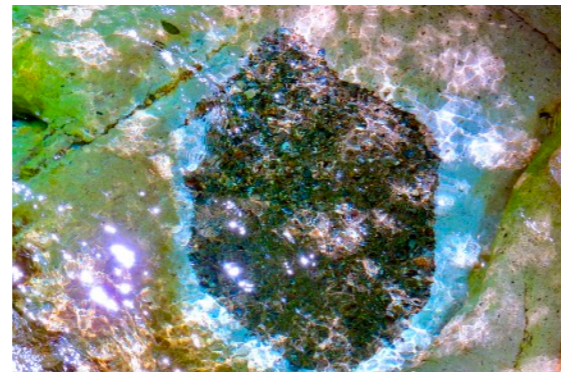
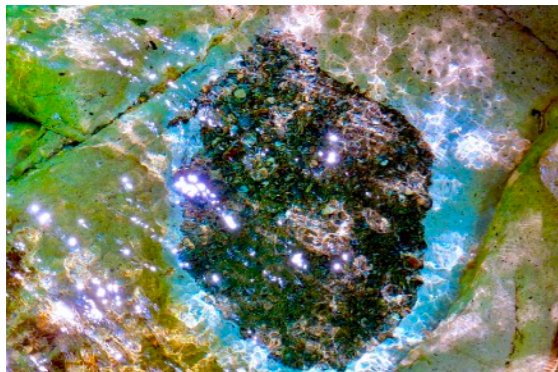
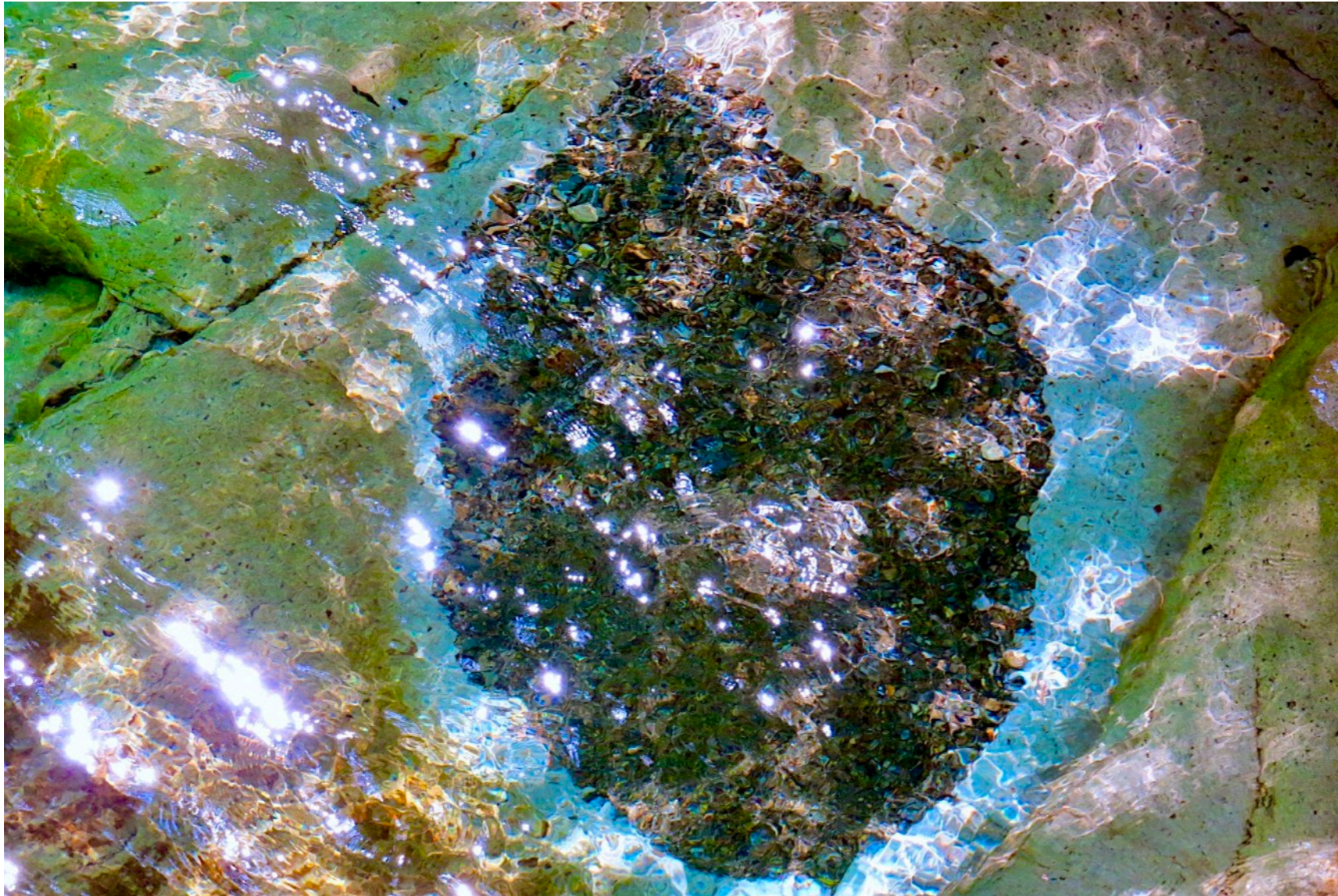
神秘学ポエジー 風遊戯  
photopos  
98

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 196集】 photo ヴァージョン

photopos 2426-2450

《2021.4.29～ 2021.5.23》

神秘学遊戯団



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

ひとは  
7年ごとに  
脱皮していく

生まれてくるのも  
脱皮だ  
7歳のときにも  
14歳のときにも  
脱皮を経験する

それから  
何度も何度も  
脱皮してゆくが

脱皮するまえと  
脱皮したあとと  
なにが変わるのだろう

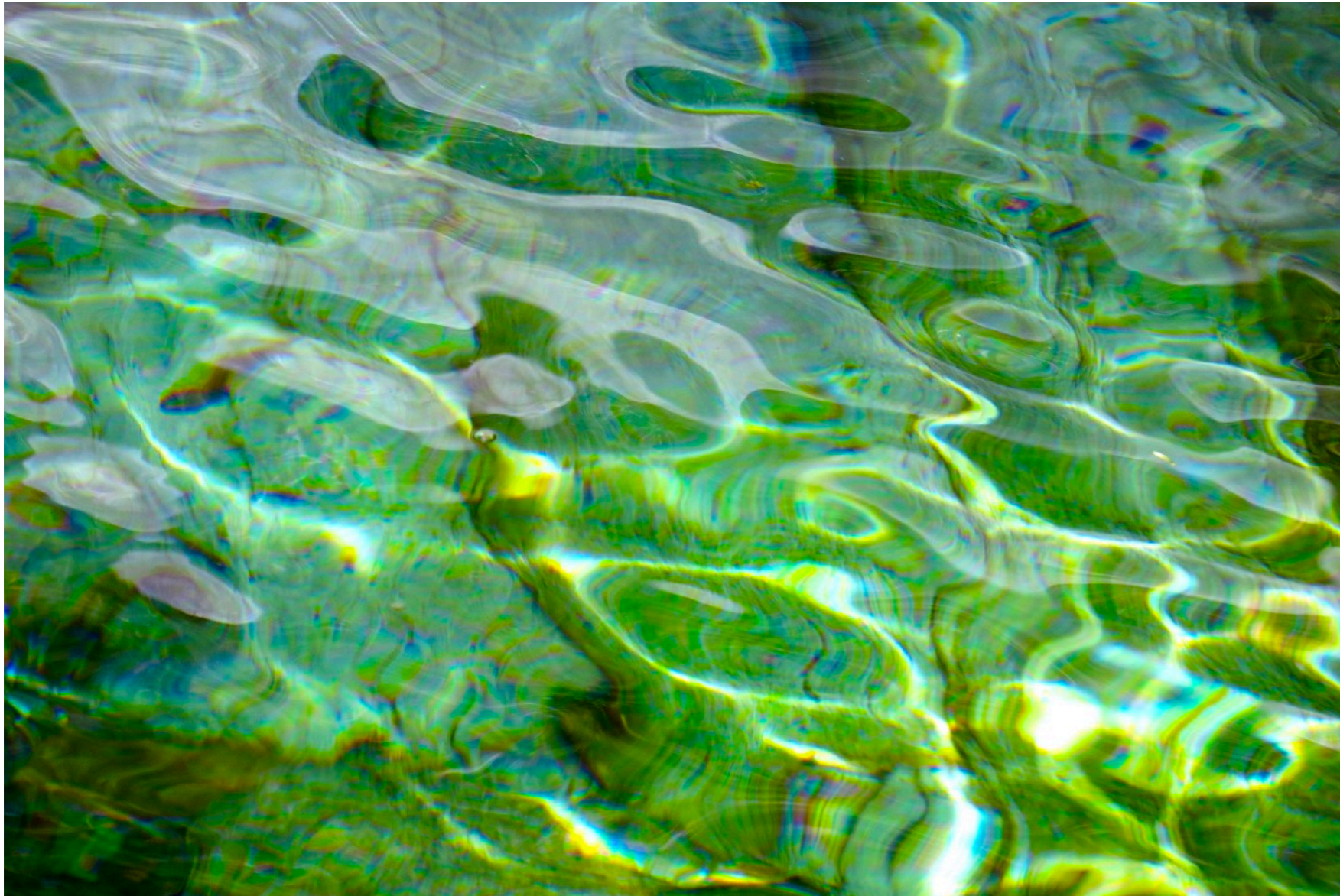
からだは  
それなりに変わるだろうが  
(からだの物質はすべて入れ替わる)  
こころも  
それなりに変わるだろう  
(こころは入れ替わりそうもないけれど)

最後に脱皮するときには  
からだを脱いでいくことになるだろうが  
こころは  
どんなふう to 脱げていくだろうか  
それとも脱げずにいたりするのだろうか

脱皮するときに  
遺した皮はどうなるのか  
そんなことを  
考えてみたりもするけれど

7年ごとでなくても  
おそらくひとは  
いつも小さな脱皮を  
繰り返しながら生きている

脱ごうとしても  
脱げなかったり  
脱ぎたくなくても  
脱いでしまったりしながら



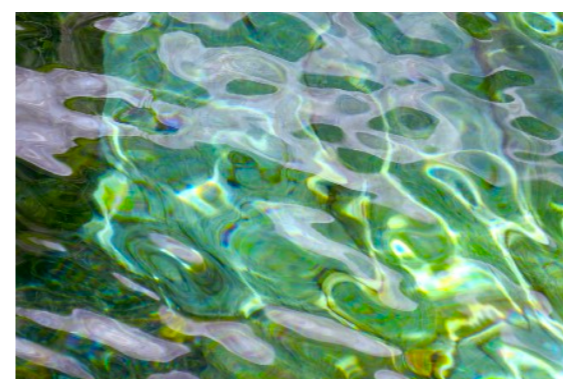
水に映る  
光の幻のように  
それはすぐに  
変わってしまうから  
たしかな言葉にして  
記録しておくのだが

光の幻は光の幻でしかなく  
光の幻でさえもそれを  
そのまま伝えることはできないのだ

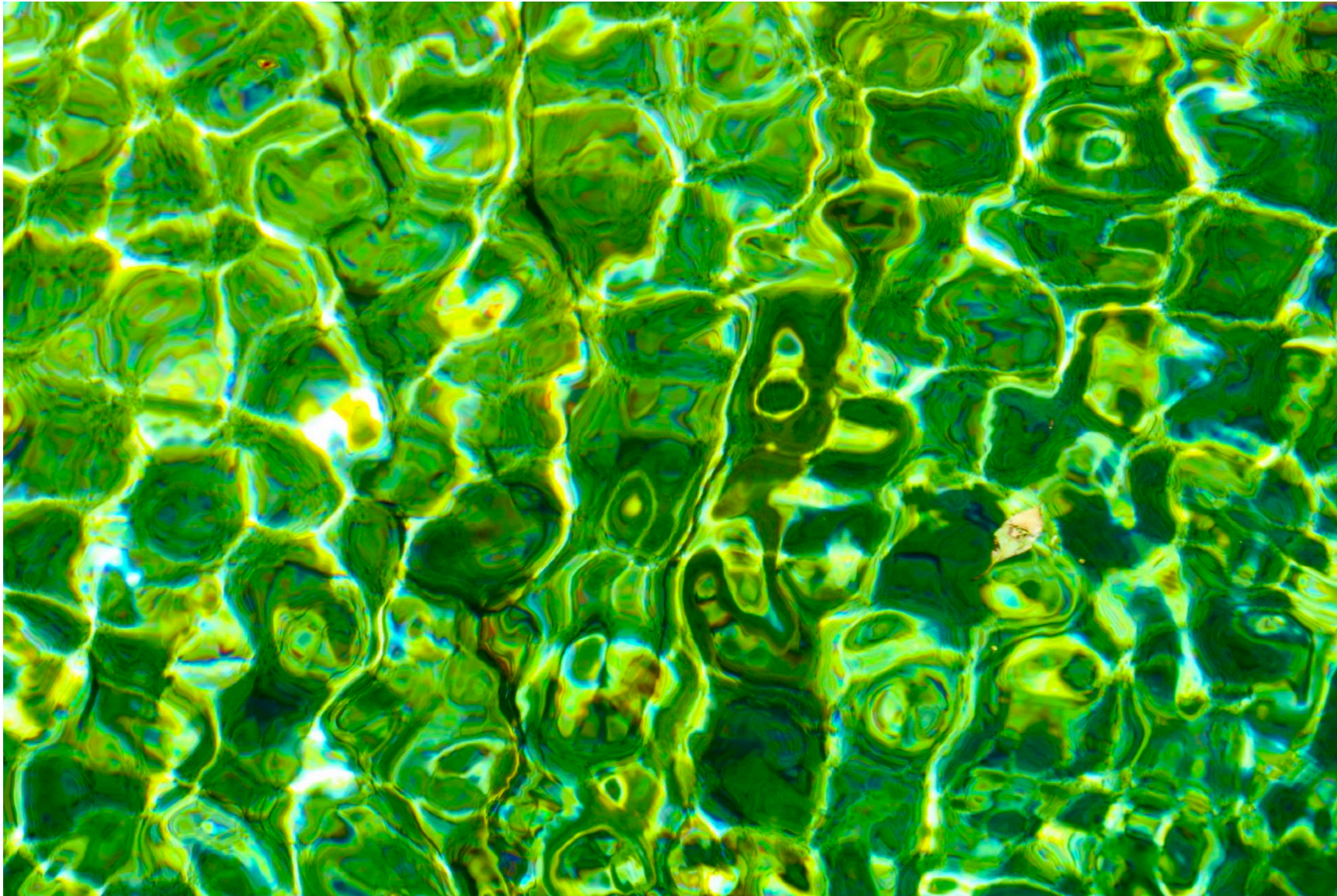
かつて釈迦も孔子も基督も  
みずからその言葉を記録に残さなかったのは  
それをそのまま伝えることが  
できないことを知っていたからだろう

心を安心へと導いてほしい  
そう願った二祖に対して  
達磨がその心をここにもってこい  
といったのもそれに似ている

水に映る幻が幻であり  
記号としては伝えられないことを忘れるとき  
幻が真実として祀り上げられてしまうのだ



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



ぼくの  
わけ  
  
ぼくの  
ぼくである  
わけ  
  
ぼくは  
なにから  
できているのか

ぼくの  
つくるものは  
ぼくなのか

ぼくは  
どこから  
あらわれたのか

ぼくの  
ぼくでない  
わけ

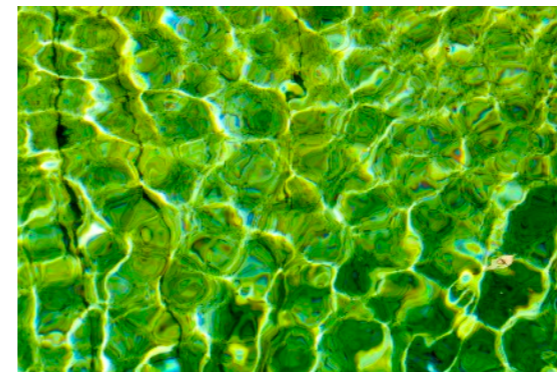
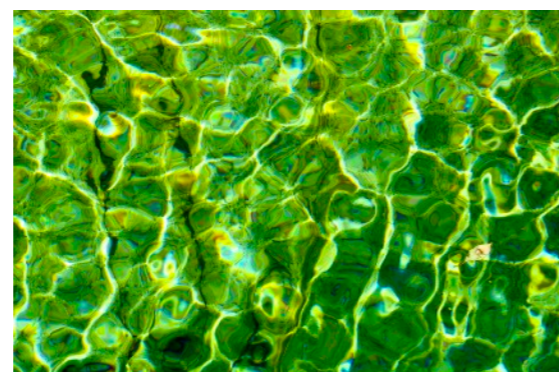
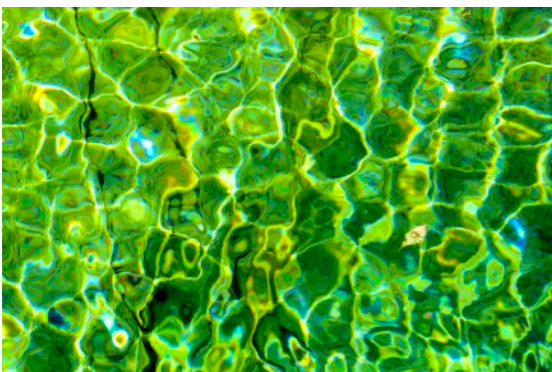
ぼくは  
ぼくを  
こえていく

ぼくは  
ぼくでなくなり  
ぼくになる

ぼくの  
わけ

まだいない  
ぼくの  
すがた

ぼくになる  
ぼくの  
じゆう



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



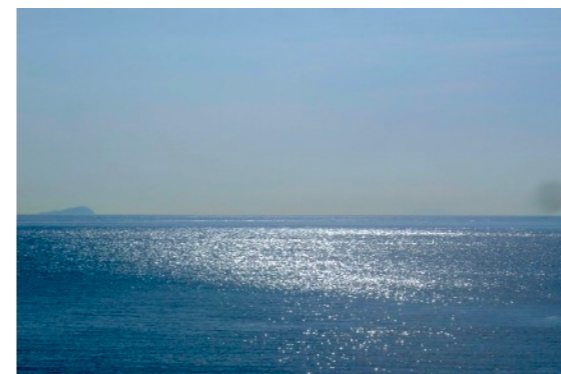
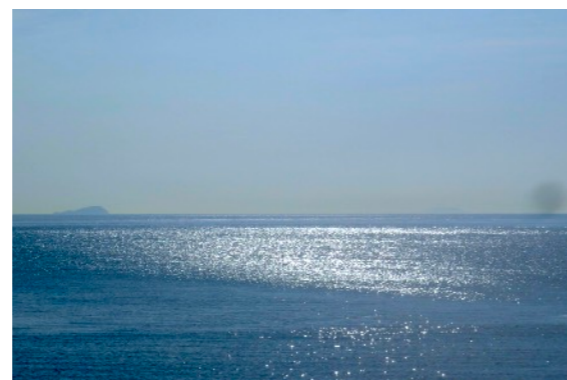
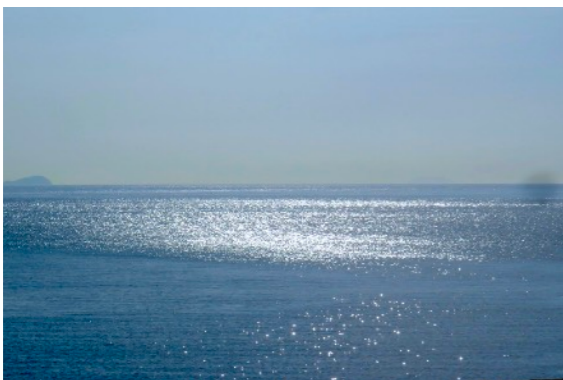
生きているというより  
生かされているように  
見ているというより  
見せられている  
うたっているというより  
うたがおとずれている

いのちには  
いのちの海があり  
光には  
光の海があり  
うたには  
うたの海がある

そしてその海は  
広くそして深く  
秘密に満ちているから

波打ち際で  
寄せては返す波の音に  
ただ耳をすませること  
できるのは  
それだけなのかもしれない

それでもときには  
無謀にも小舟で彼方へと  
漕ぎ出そうとすることもあ  
るけれど  
そこで知らされるのは  
やはり海のはてしなさなのだ





※愛媛県久万高原町・面河溪にて

境界に  
佇む  
眼のなかを  
通り過ぎる  
異形の者たち

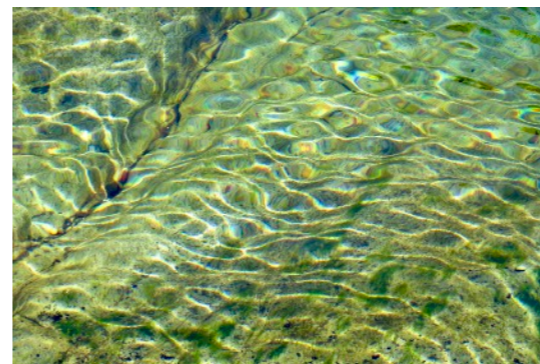
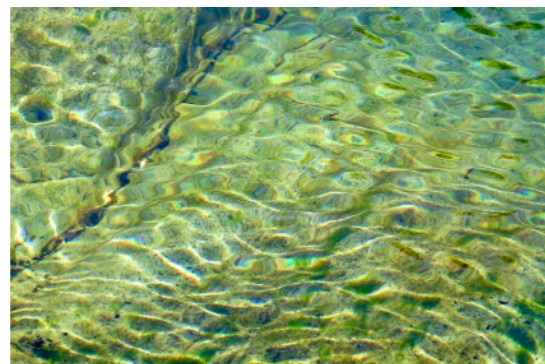
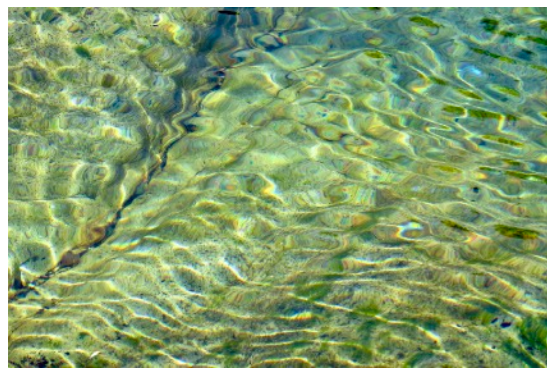
ここを通すか  
通さぬか  
おまえの身は  
われらとは異なる  
言葉でできておるのぞ

境界を  
まさぐる  
手のなかで  
夢見る  
未生の迷宮

異言に導かれ  
火と水を抜け  
そのあわいを歩むには  
秘密の言葉を  
知らねばならぬ

境界で  
ゆれる  
肚のなかから  
現れる  
超自我の幻視

言葉をなくした  
死者たちが  
召還される！  
その聲となり  
うたとなりて  
語ろうぞ



与えられたことばを  
いくら繰り返しても  
そこに新たなものは生まれない

ことばは  
食べられることで養分となり  
魂の器官へと送られなければならない

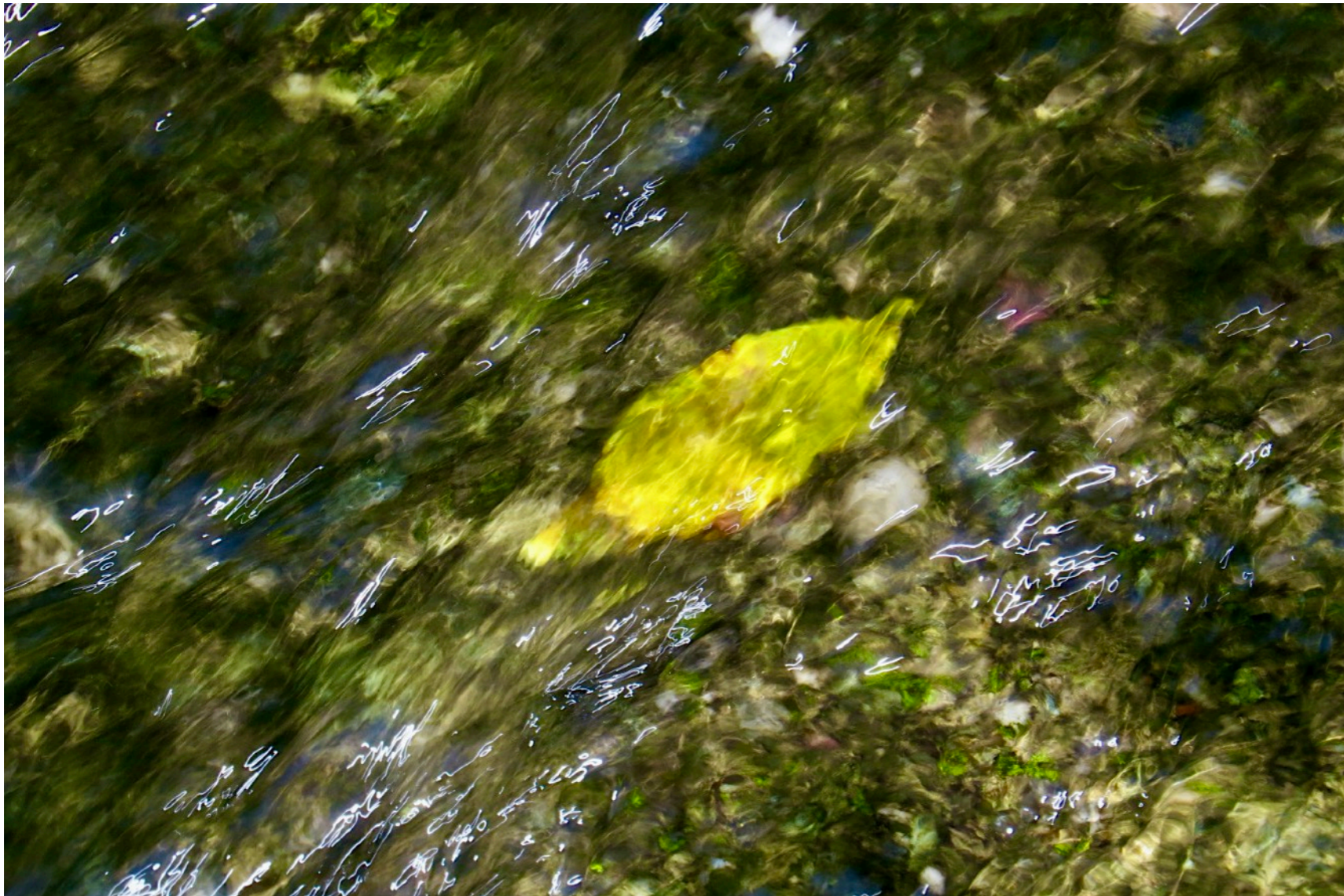
両手に抱えきれないほど  
たくさんのことばをもっていたとしても  
ひらかれたからっぽの掌がなければ  
たいせつなことばを受けとることはできない

たいせつなことばを  
受けとることができたとき  
そのことばは魂の養分になり  
光をもった新たな姿に変わる

そのことばは  
発せられるだけで  
そこにはじめての旋律が生まれる

そのことばは  
発せられるだけで  
そこにはじめての世界が生まれる

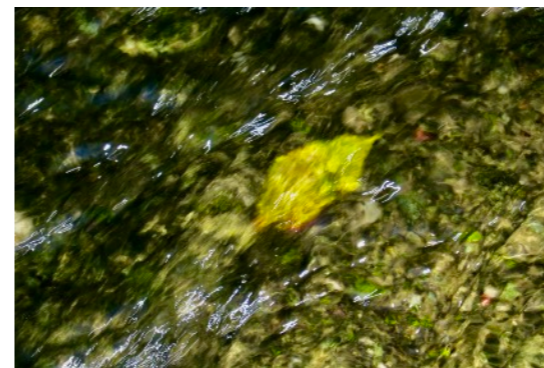
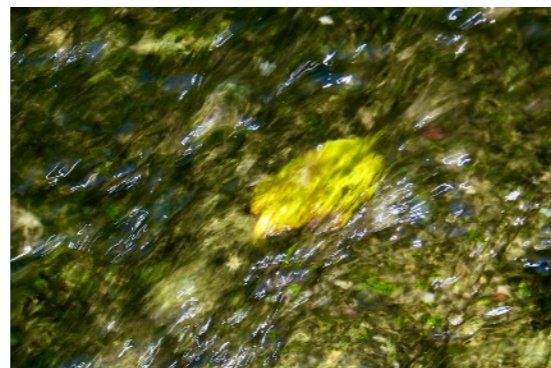
そんなことばと  
ともに生きられますように



じぶんから  
逃げることも  
じぶんへと  
逃げることも  
できないから  
自由になる

どこへ  
行けばいいのか  
決めるのは  
じぶんだから  
自由になる

じぶんの理由は  
与えられはしない  
じぶんでつくる  
それしかないから  
自由になる

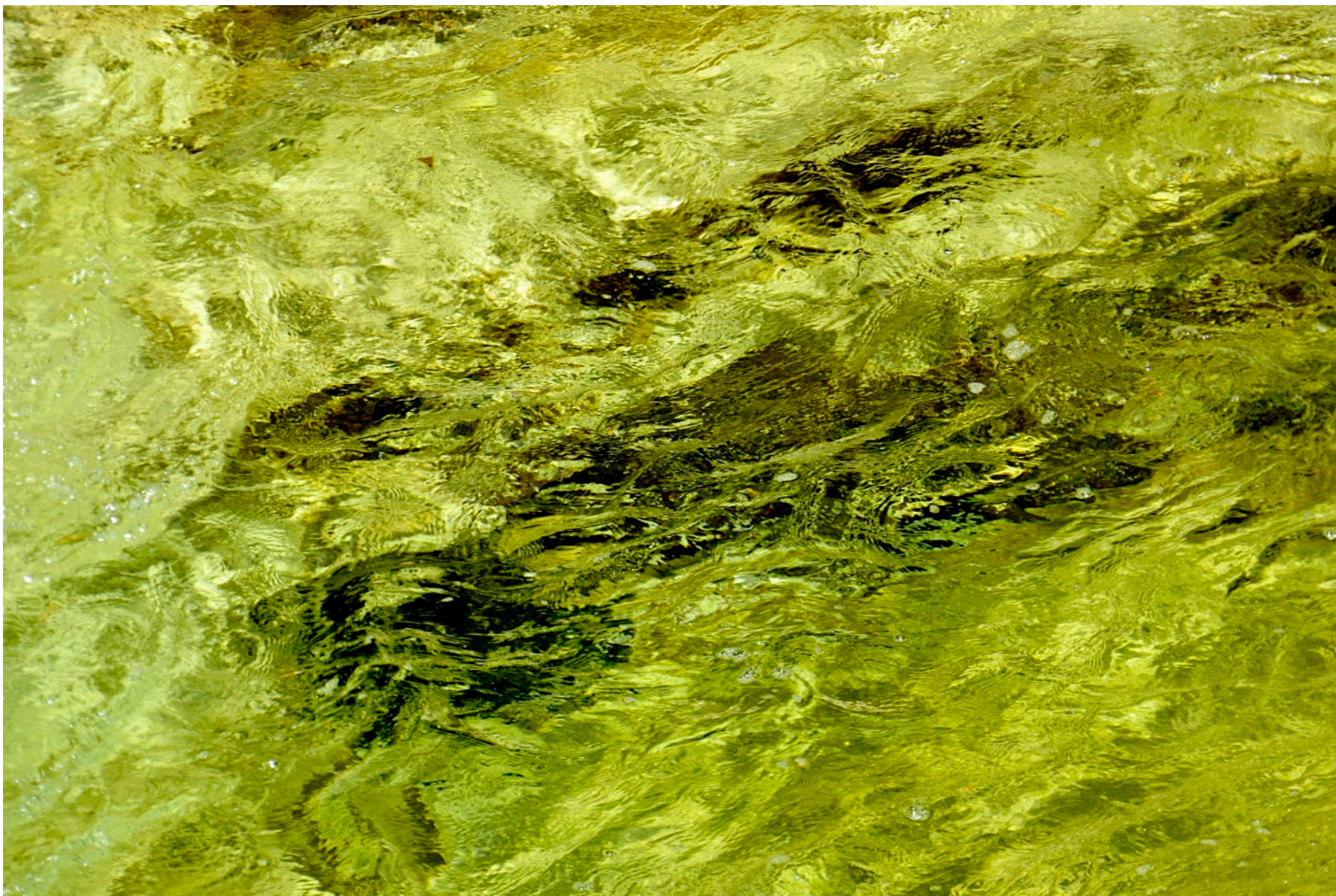


ひとのほんとうは  
じぶんのほんとうではない  
じぶんで学び  
なにからでも学ぶために  
自由になる



☆photopos-2433

2021.5.6

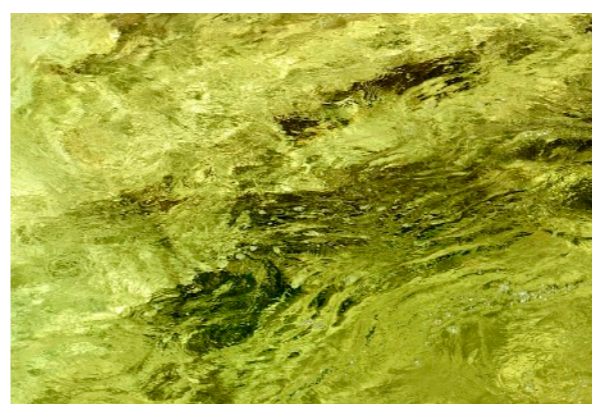
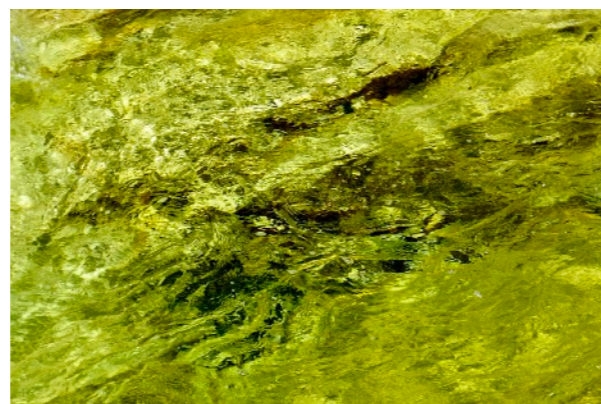


驚くために  
生まれてくる  
わからないから  
生まれてくる

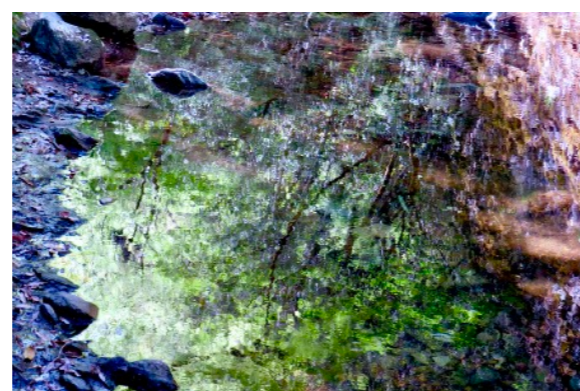
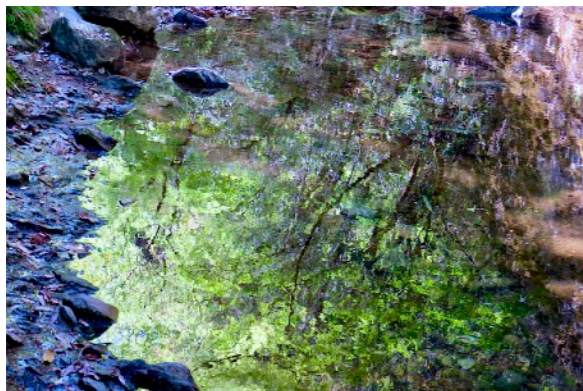
驚かないでは  
遊べない  
わかっていたら  
遊べない

常に創造の途上にある  
世界の謎を知るために  
人は生まれ驚き遊び  
そしてまた帰還してゆく

帰還するだけのために  
生まれてくるのは貧しい  
世界は驚きに満ちている  
驚きこそが世界を創るのだから



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

生まれるまえ  
わたしは世界だった

わたしは生まれ  
世界から  
分かれていった

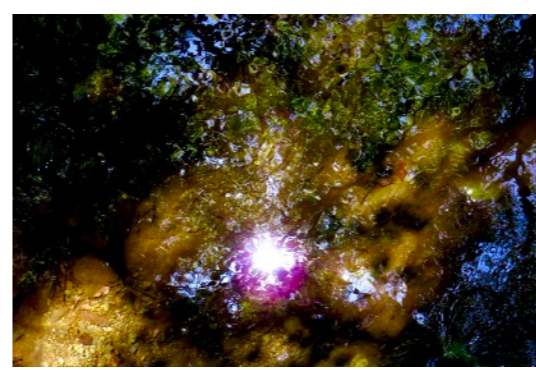
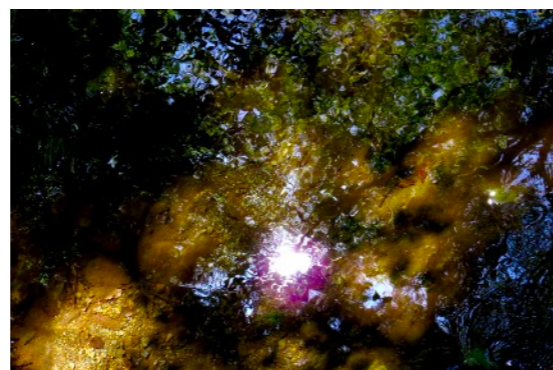
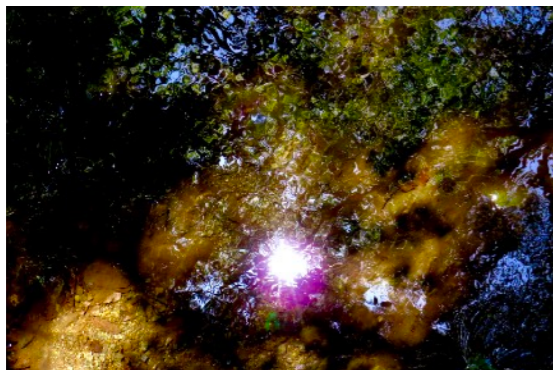
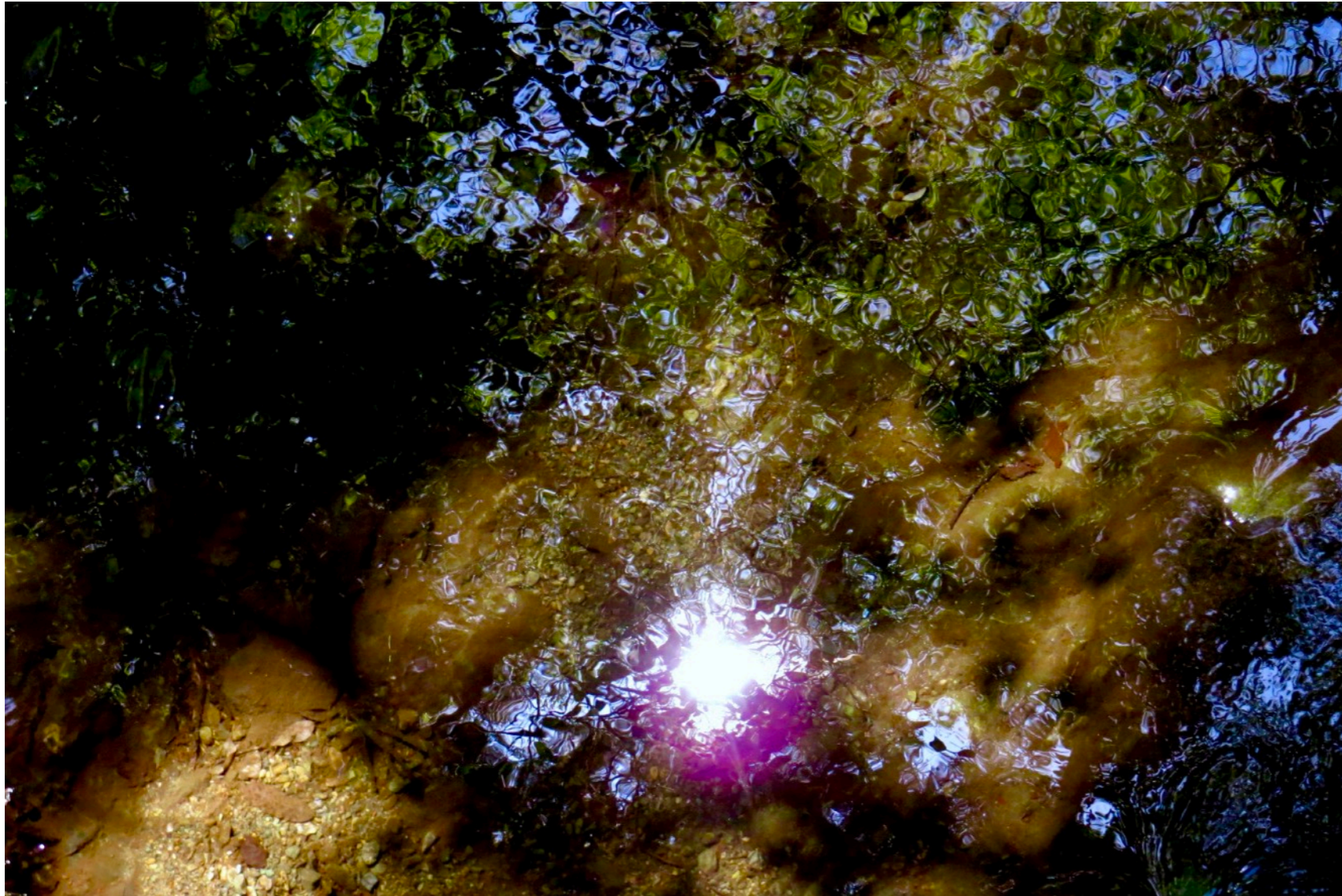
わたしと  
わたしでない世界が  
生まれた

わたしのからだは  
わたしでないものでできている

けれど  
わたしのこころは  
わたしでできているのだろうか

それでも  
わたしはたしかに  
世界から生まれたのだ  
わたしのなかには世界が生きて  
いる

そして奇跡のように  
わたしはこうして  
わたしとして世界にいる



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

見ることで  
見えなくなるものがあるから

見ることを  
超えるために  
深みへと降りる

すべてを照らす  
光とともにあるように

こころは  
喜怒哀楽のまわりで  
沼のような迷路になるから

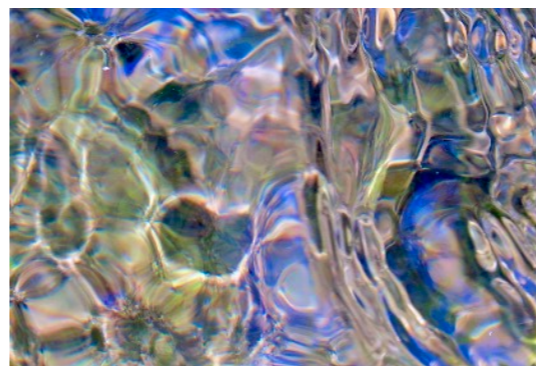
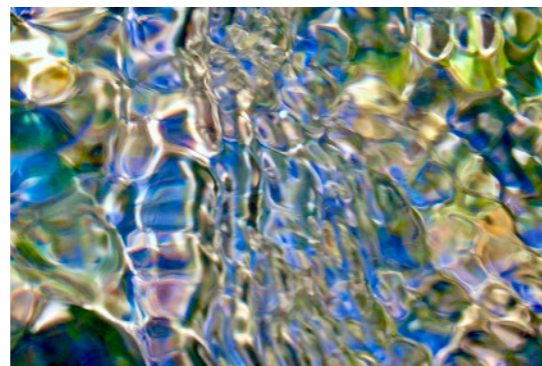
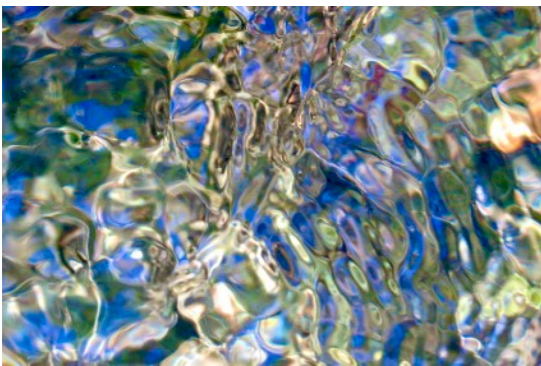
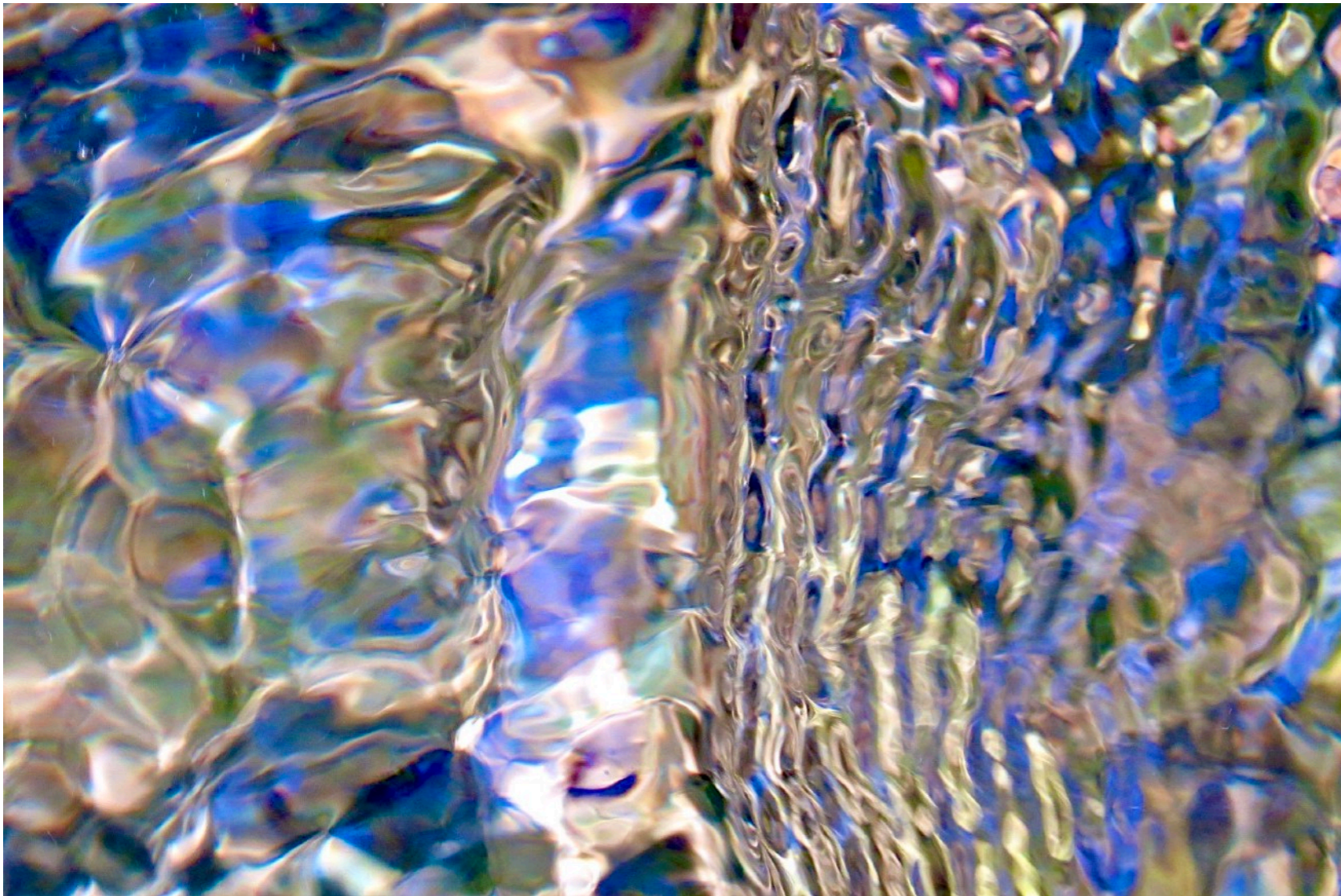
こころを  
超えるために  
深みへと降りる

ほんとうのことばで  
こころがうたえるように

わたしは  
わたしという扉に  
閉ざされているから

わたしを  
超えるために  
深みへと降りる

深く眠り込んだわたしが  
目を醒ますことができるように



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

夢に  
ほんとうも  
うそもないように

世界には  
ほんとうも  
うそもないだろう

そして  
私にもまた  
ほんとうも  
うそもありはしない

たとえ愛が  
うたかたのように  
生まれては消え  
消えては生まれてゆくとしても

愛にもまた  
ほんとうも  
うそもないから

たとえ遠く離れていても  
剣をもたらずのものであったとしても  
あなたに会わずにはいられないのだ



生は養われねばならない

生を養うためには  
からだを養わねばならない

からだを養うためには  
こころを養わねばならない

こころを養うためには  
わたしを養わねばならない

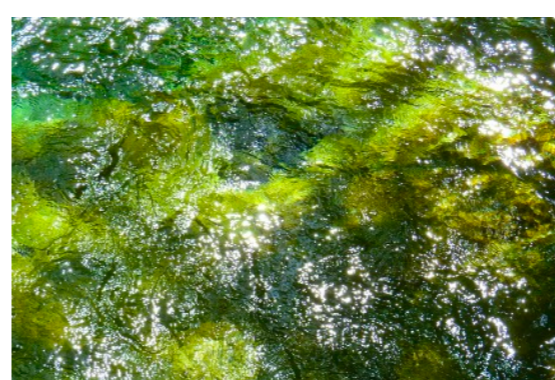
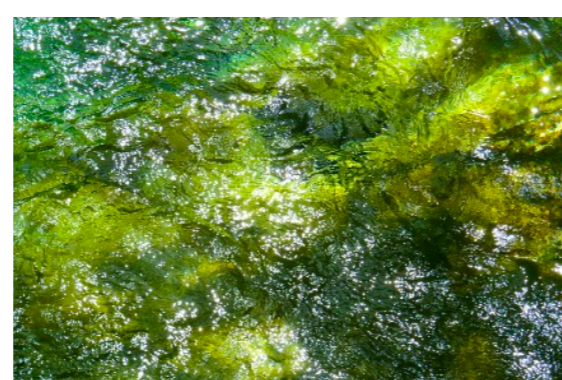
わたしを養うためには  
自由を養わねばならない

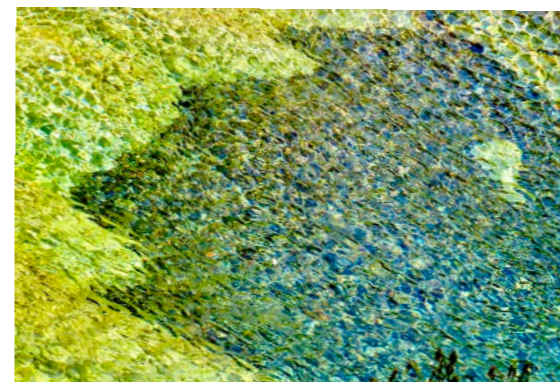
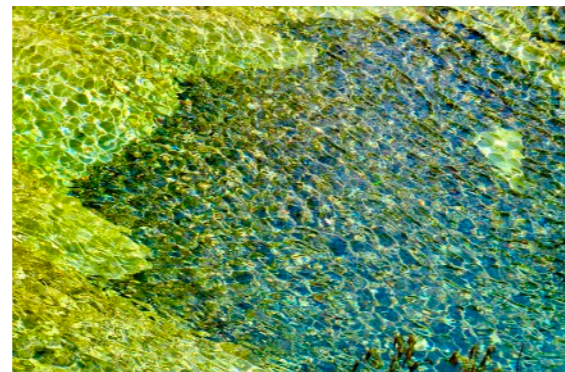
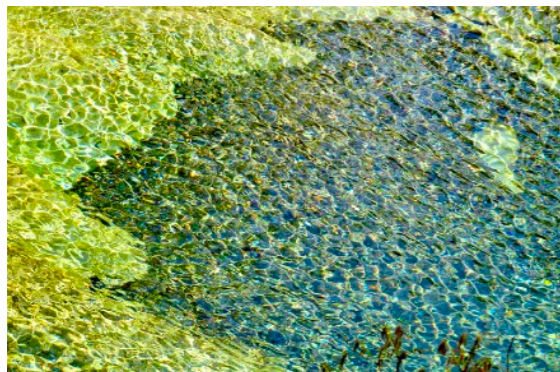
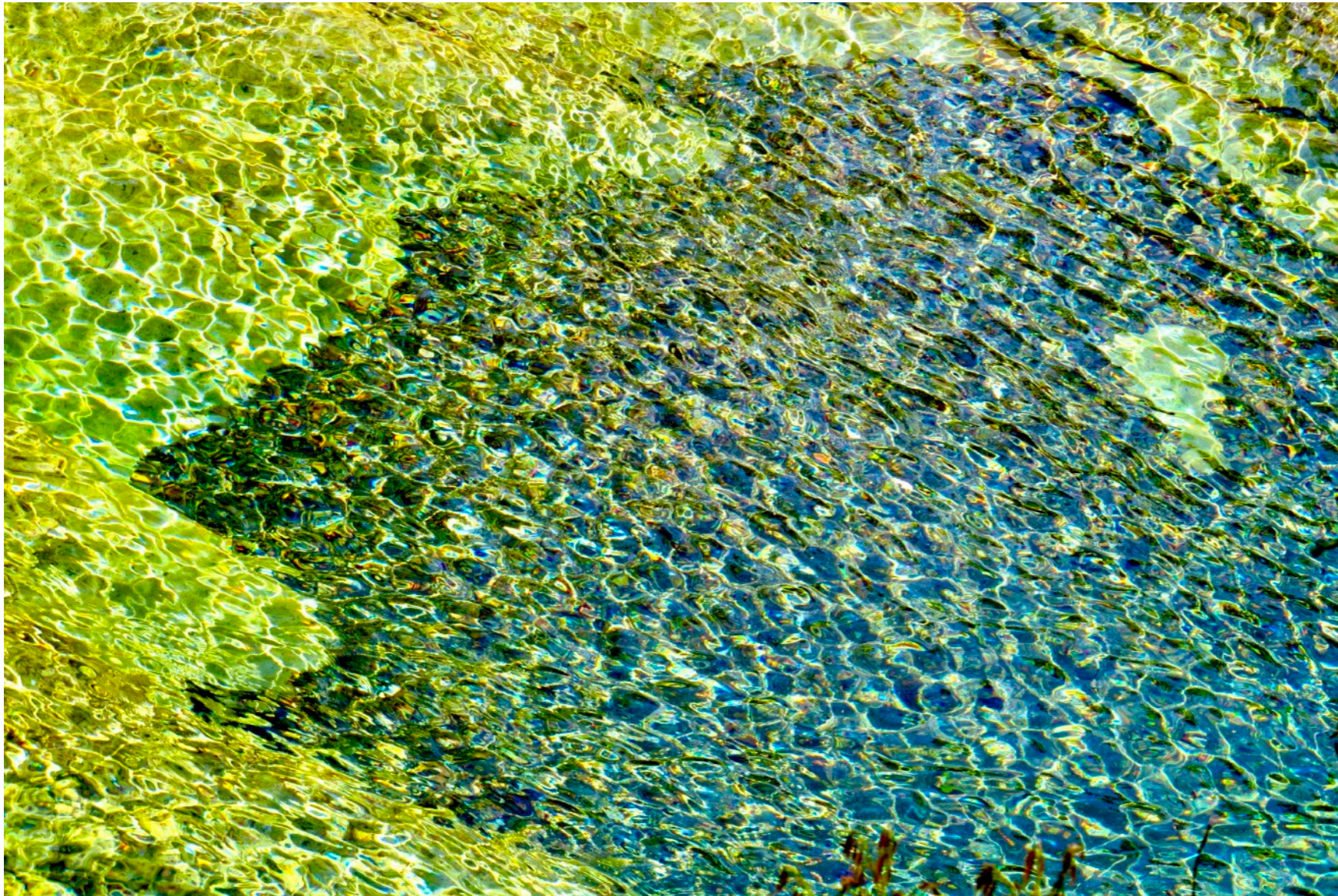
自由は与えられはしないから  
わたしははるかな旅にでる

まだ見ぬわたしをつくるため  
まだ見ぬ世界をつくるため

そのはるかなオデッセイが  
いまここから紡がれてゆく

生を養うことは死をも養うこと  
生死を貫き時空を超えた旅へ





※愛媛県久万高原町・面河溪にて

なぜ  
偶然が  
訪れたのか

わたしが  
わたしでしかない  
という  
偶然

わたしは  
わたしでなくても  
よかったのに  
わたしは  
わたしののだ

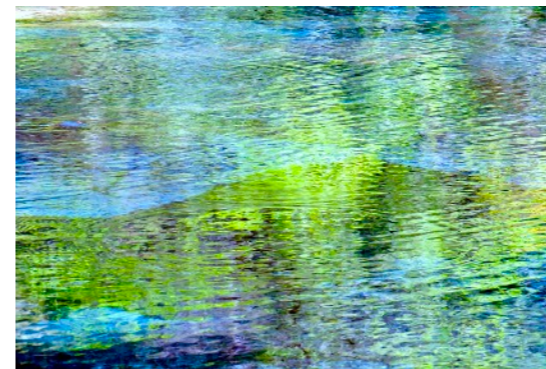
わたしは  
わたしでしかないから  
あなたではない

あなたではないから  
あなたのわたしには  
どうしても近づけない

あなたが  
わたしのわたしに  
どうしても近づけないように

それでも  
わたしは  
あなたとともに  
偶然を生きたいと思う

そして  
わたしは  
あなたとの自由を  
ともに生きたいと思う



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

はじめて  
覚えた  
ことば

それは  
どこから  
訪れたのか

いまではそれが  
どんなことばだったのか  
思い出すことはできないけれど

そのことばはいまも  
わたしのなかのどこから  
知らずふいに語りかけてくる  
そんなことばなのかもしれない

はじめて  
語った  
ことば

それは  
だれに向けて  
語られたのか

いまではそれが  
だれに向けてだったのか  
思い出すことはできないけれど

わたしはいまでも  
わたしのなかのだれかにむけて  
知らずそのことばで  
語りかけているのかもしれない

はじめて  
知った  
悲しみ

それは  
どんな  
悲しみだったのか

いまではそれが  
どんな悲しみだったのか  
思い出すことはできないけれど

悲しみはいまも  
わたしのずっと奥で  
いまでは知られないなにかを  
悲しんでいるのかもしれない



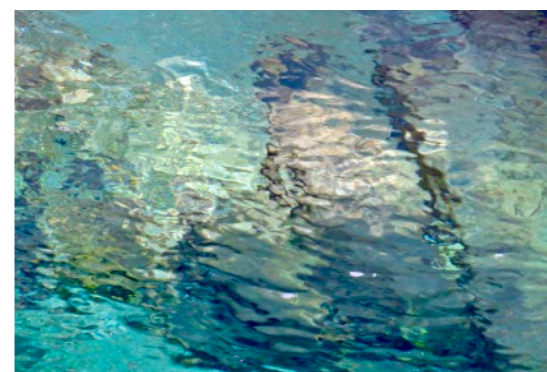
はじめて  
その言葉を知ったとき  
言葉はまだ  
からっぽな器だった

わたしはそこに  
容れるものをもたずにいた  
わたしは器に容れるものを探した  
その言葉とともに生きるために

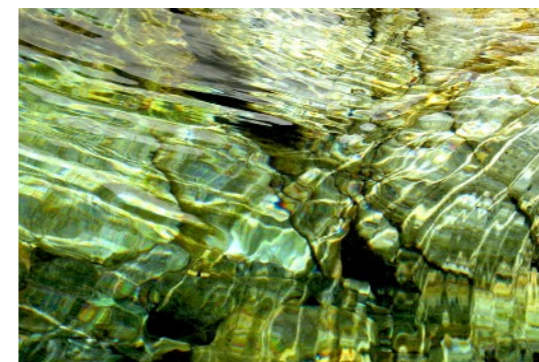
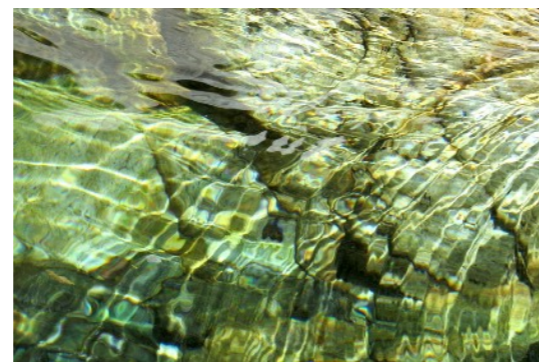
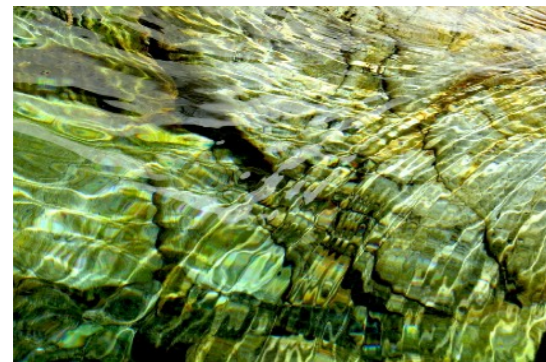
あるものを容れたとき  
言葉は悲しみにふるえ  
またあるものを容れたとき  
言葉は喜びに充ちた

そうして言葉は変わっていった  
わたしもまた変わっていった

ひとつひとつ  
言葉は満たされていき  
わたしは言葉とともに  
じぶんを育て  
わたしの生きる世界も  
言葉とともに変わっていった







※愛媛県久万高原町・面河溪にて

目をとじて  
両のてのひらを  
両の耳にあてごらん

そのぬくみと  
不思議な響きとともに

深い海の底で  
じっと耳をすませて  
過ごすように

心をひらいて  
両のてのひらを  
空にむけてごらん

見えない翼をひろげ  
時を超えた旅人になって

遠い星の彼方で  
奏でられる豎琴にあわせて  
永遠を歌うように



※愛媛県松山市・重信川河口にて

争いがある

ひとつの争いが去っても  
もうひとつの争いは生まれてくる

争いは争いを生み  
争いを止めようとしてまた  
またあらたな争いが生まれる

争いは  
利から生まれる  
他の利を求め  
みずからの利としようとする

ひとつの利を得ても  
もうひとつの利を求めようとし  
求める利に終わりはない

争わないために  
争わせないために  
いったいなにができるだろう

心のなかに  
争いが満ちているとき  
争う心は  
争う心と響き合い  
争いは絶えることがない

心は叫んでいる  
我はここにあり！  
我を認めよ！と

その底には  
じぶんをもてあまし溢れだす  
深い悲しみと怒りがある

それは愛の別の姿  
そのことに気づいたとき  
争いもしだいにその姿を変えてゆく



じぶんを  
超える方法は  
ふたつある

群れのなかに  
じぶんを加えて  
安心を得るか

それとも  
じぶんを離れ  
自由になって  
永遠の世界に遊ぶか

鳥には鳥の  
安心と自由があり  
人にはひとの  
安心と自由がある

じぶんを  
超えるために  
じぶんをなくすか

それとも  
自由を携え  
あらたなじぶんへと  
帰還するか

安心は近道だが  
自由ははるかな道になる





魂の謎の前で  
救いを求める魂は  
魂の深みに降り  
試練を経て  
あらたな姿へと  
変容しなければならない

ひとつ降りて  
我が悩める魂を救い  
その姿を変え

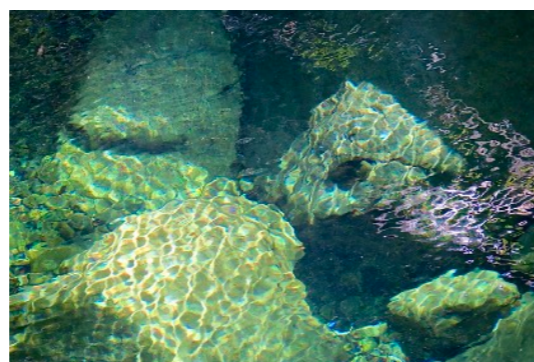
さらにひとつ降りて  
生死を越えた我が魂を救い  
またその姿を変える

さらに降りると  
試練は我が魂を超え  
深みで救いを求める  
数多の魂もろとも  
さらなる変容が求められる

救いとは  
魂のむすびである

我が魂をむすび  
我を超えた魂をも  
むすばなければならない

そうして  
魂は変容していき  
魂の謎は解かれてゆくのだ



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

かつて人間には  
三つの宝物があった

からだ  
心と  
精神（霊）である

けれどやがて人間は  
精神（霊）をなくして  
からだ心だけで  
生きようになった

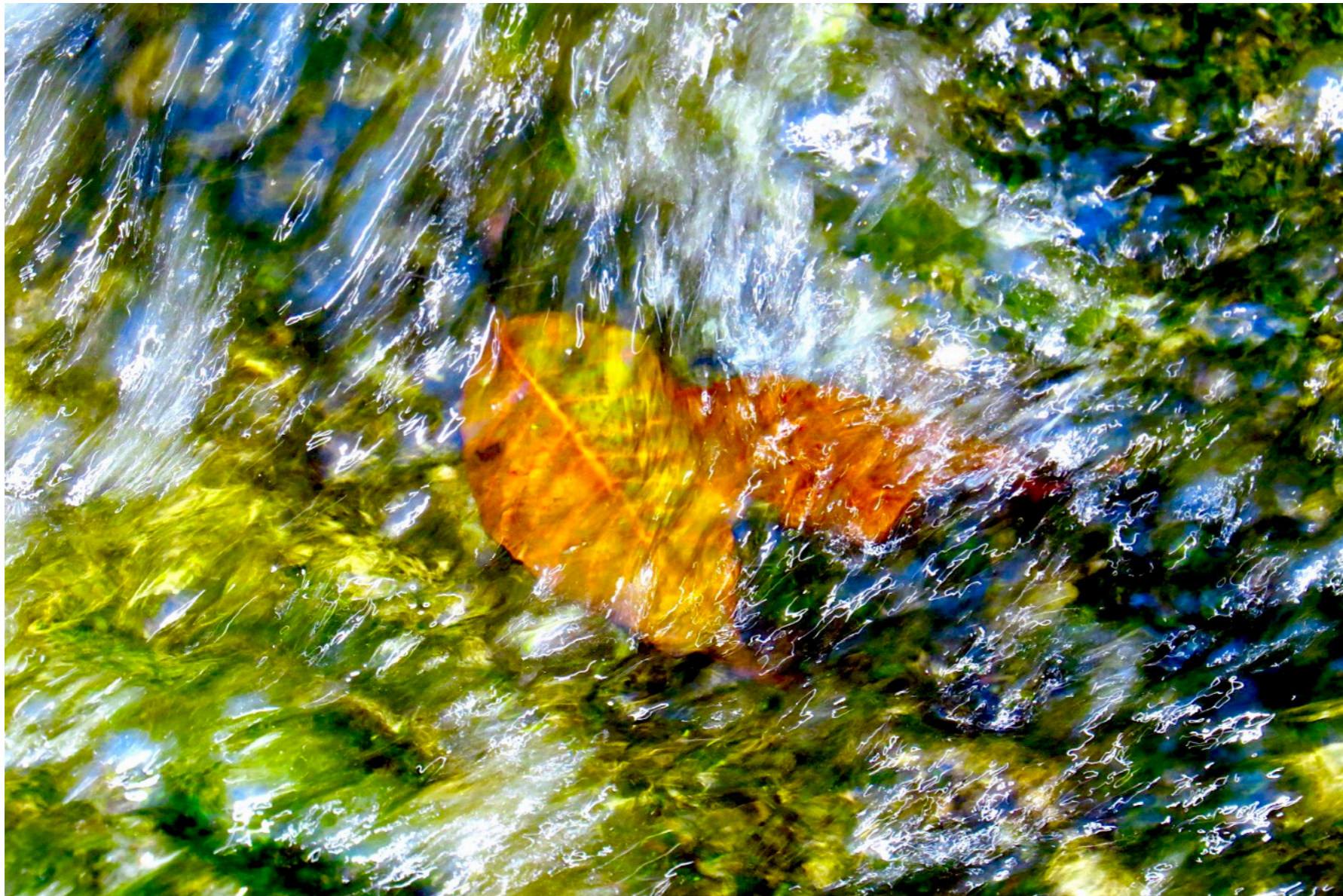
そしていまでは  
心もなくして  
からだだけで  
生きようになり

そのからだからも  
たいせつな知恵の宝物を  
投げ捨てようとしている

知恵のないからだだけになった人間は  
こんどは考えることを  
機械にしておもうとしている

考えない  
からだだけの人間は  
もう別の存在に  
なってしまうのかもしれない

かつて昼間に灯りを点して  
人間を探して街を歩いた禅者がいたが  
どうしても見つけることはできなかった  
そのかつての人間にも  
まだ心はあったのだろうか



今日は  
昨日の後に  
やってくるけれど

今日はすでに  
昨日ではないから

今日のぼくは  
もう昨日のぼくじゃない

昨日のぼくのことを  
どんなにふりかえっても  
今日のぼくにはならないのだ

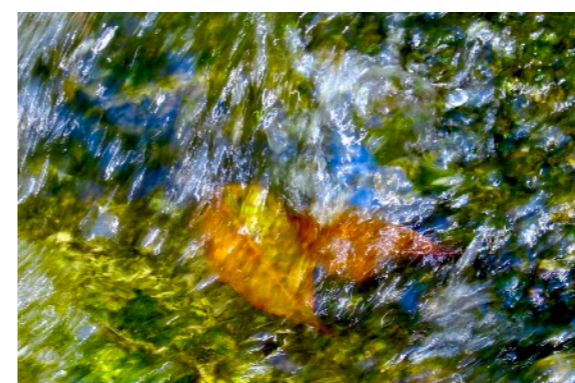
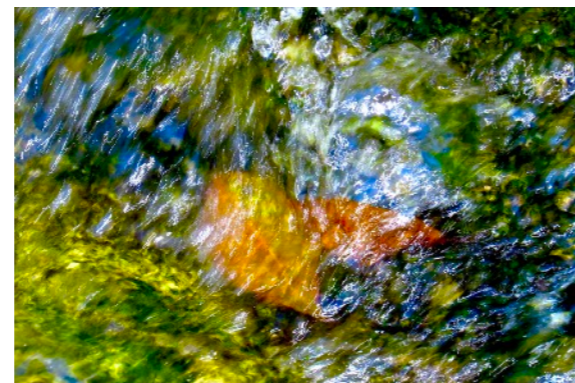
明日は  
今日の後に  
やってくるけれど

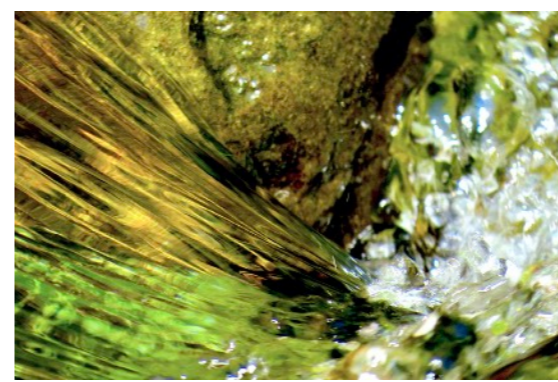
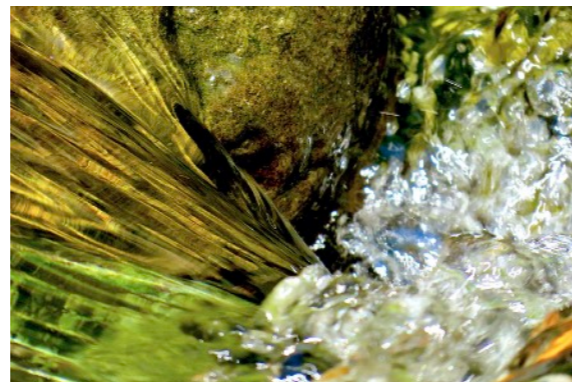
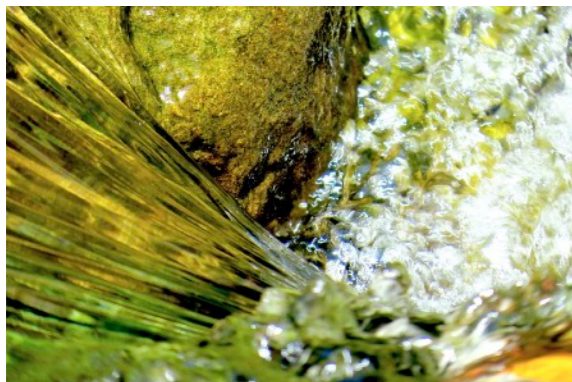
明日はもう  
今日ではないから

明日のぼくは  
もう今日のぼくじゃない

今日のぼくのことを  
どんなに懐かしがっても  
明日のぼくは  
今日のぼくではいられないのだ

ぼくはぼくでないぼくに  
変わりつづけていくから  
ぼくでいることができる  
生と死さえも超えて





※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

歴史は  
なにを  
語るか

人類は  
どこから  
どこへと  
向かっているか

何を求め  
何を得て  
何を失ったか

何を語り  
何を語らず  
何を騙ったか

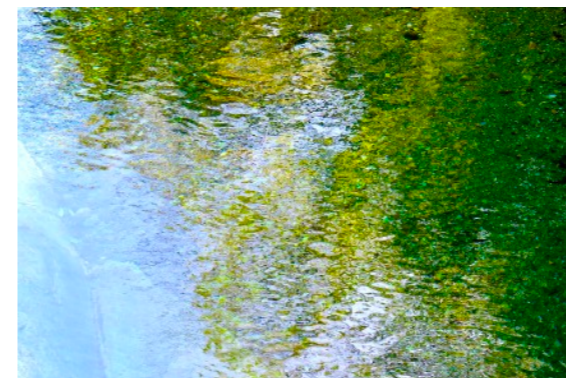
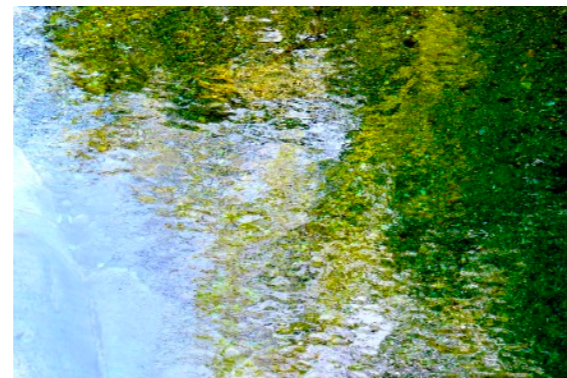
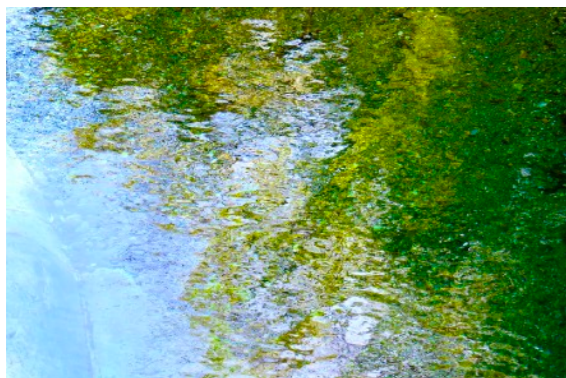
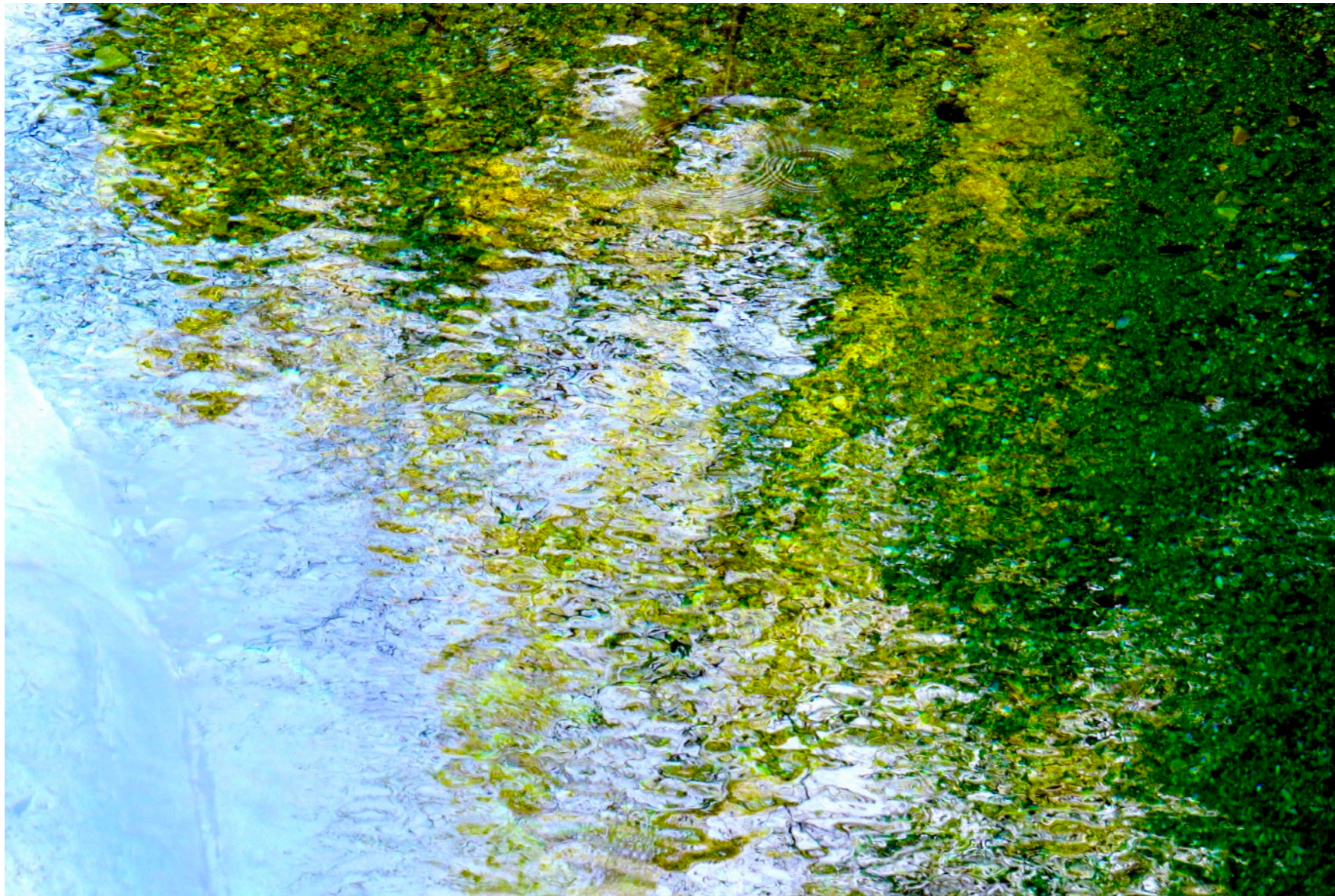
何を知り  
何を拒み  
何を忘れたか

何を愛し  
何を悲しみ  
何を憎んだか

やがて  
ずっと先に  
人類は  
夢のように  
振り返ることになる

からだはどう変わり  
こころはどう変わり  
精神はどう変わったか

そのとき  
みずからの姿を  
世界の鏡に映し  
人類は何を語り得るだろう



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

なぜ生まれてきたか  
思い出せそうで  
思い出せない

わたしはたしかに  
知っていたのだそして  
いまでも知っているはずなのに  
思い出せないでいる

そのくせ  
忘れたいことが  
忘れられないまま  
泣き虫の道化になったりもする

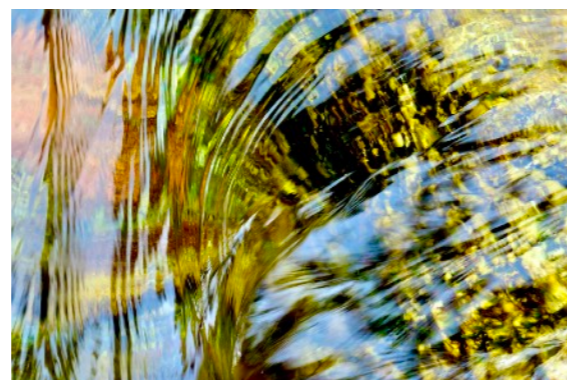
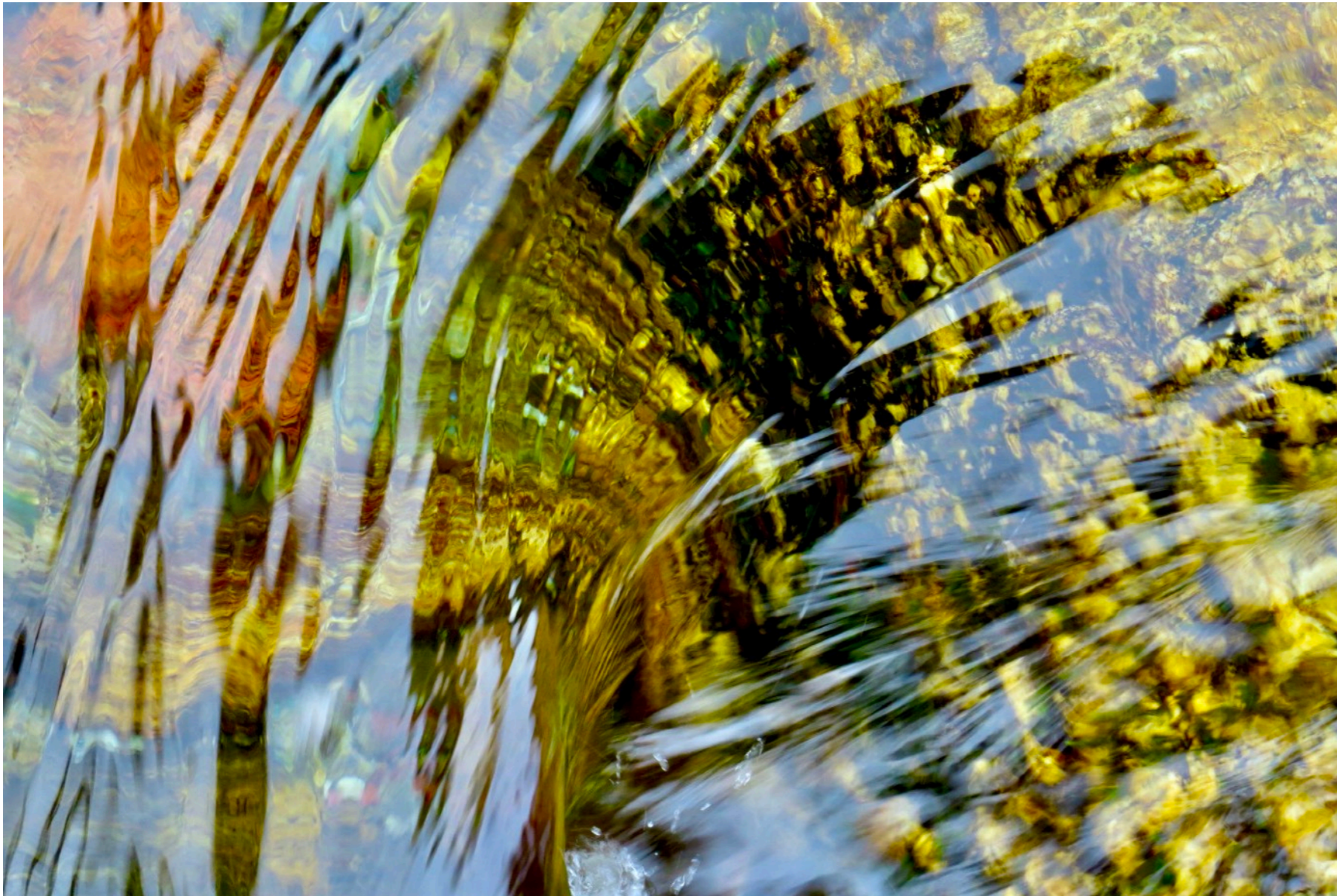
思い出せないのには  
理由があることも知っている  
思い出に生きないようにするためだ  
答えを見てから  
問いに答えてはならないように

なぜわたしが  
わたしなのか  
わからない

わたしはたしかに  
わたしでなければならないのだ  
そのことを知っていて  
わたしであることが  
重い荷物になっている

わたしであることが  
なぜ苦しいのか  
ほんとうはわかっているけれど  
わたしはわたしを超えてわたしに  
ならなければならないことがわかっていて  
それがこわいだけなのだ  
思い出のわたしから離れてしまいそうで





時代とともに  
生きるということは  
時代に流されることじゃない

ひとつと同じことばを  
繰り返すことは易しいけれど  
ひとつと同じ正義を  
生きることは易しいけれど

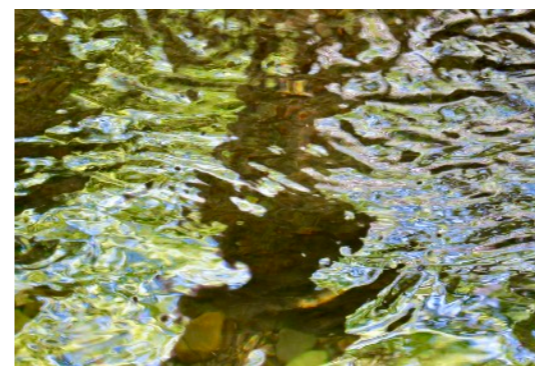
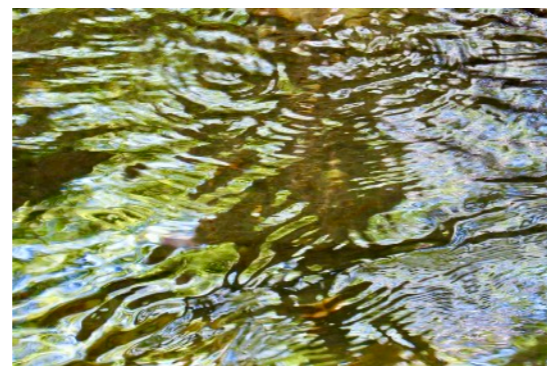
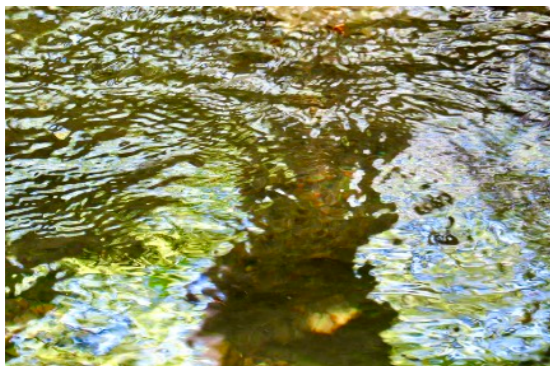
そのことばも正義も  
同じ顔をした  
不気味な群れをつくるだけだ

一人ひとりの耳の奥で  
ひそかに響いているうたを  
たしかに聴きとれるように

一人ひとりの視線の彼方に  
ひそかに灯っている光を  
たしかに見る力をもてるように

時代に耳をすませ  
時代の光に目を向けるのだ

時代とともに  
生きるということを  
時代を超えて生きる力にするために



新しい葡萄酒には  
新しい皮袋が必要になるように  
知らないことを知るためには  
皮袋を新しくしなければならない

教えるということは  
古い皮袋である  
そして学ぶためには  
新しい皮袋にならなければならない

教えられる者は学ばない  
学ぶ者は教えられるのではない  
教えることと学ぶことは  
つねに相剋する関係にある

変わるためには  
教えられた私から離れなければなれない  
新しい心には  
新しい私が必要になるからだ

新しい私になることは  
永遠にじぶんをつくりつづけることだ  
学ぶポイエーシスである  
そこにはおなじ私は存在できない

愛することもまた  
永遠のポイエーシスである  
私とあなたは  
新しい皮袋になって愛しあう